



高崎高校同窓会報

2022
No.56

発行所／高崎高校同窓会 〒370-0861 高崎市八千代町2-4-1 TEL.027-320-6024

令和4年11月30日

和太鼓部が全国の舞台へ “蒼天”の音 高らかに鳴り響く



第46回全国高等学校総合文化祭 とうきょう総文2022／練馬区立練馬文化センターにて

潮流

79期

Win winのお付き合いで 世界から学びたい

JICA高崎分室長

高橋 政行



私は高高を1980年に卒業したので79期になる。中学時代に読んだ本で、終戦後間もない米国に留学してドラマチックな経験をした故ミッキー安川氏の「ふうらい坊留学記」に感銘を受け、将来は海外に出て日本ではできない経験を積むことに憧れを持っていた。

高高に入学後は、初心者で始めた剣道は早々に断念し、フォークソングバンドもすぐ断念、バイトをして購入したバイクはガス代が払えず断念、その後、北海道まで走る自転車旅を敢行、など、彷徨と言えるような日々だった。転機は2年の夏休み明け、勉強をしておらず成績が低迷していた私を本気で叱ってくれた友の言葉で、そこから将来を真剣に考え始めた。さらに翌年の春休みに自転車で会津、裏磐梯を一人旅して、五色沼から眺める磐梯山の美しさに感動し、「よし、沢山旅をする為に大学に行くぞ」と当面の目標を決めたのだった。遅ればせの追い上げが奏功し、なんとか東京外国語大学のスペイン語学科に進むことができた。

欧米の情報は国内でも豊富なので、別の文化を学びたい、けれど広い地域をカバーする言語がいい、という好奇心と横着さでスペイン語を選んだ。思いは南米へ、特に「コンドルは飛んで行く」の切ないイメージが広がるアンデス山脈へ向かっていた。インカ帝国を繁栄させたケチュア族の世界でもある。

「1年休学して南米を旅する」を目標に大学時代の日々は、自転車旅行、体力づくりの為にバドミントン、資金作りの為にバイト(牛井店など)などで充実していた。

そして大学4年目を休学して、ペルー・アンデスのクスコ(インカ帝国の首都)に向かった。標高3800メートルほどの高山地帯だ。現代のインディヘナの生活・文化を知る為に村に住み込みたかった。人伝の紹介の連鎖で、ついにはクスコから1時間乗り合いバスに乗り、さらに1時間山を登っ

たところにある「キルワイ」村の若い村長のお宅に居候することができた。村の生活は単調な農作業が多く、見るだけでは暇なので、子供たちと歩き回ることが多かった。8歳になる村長の息子、アレハンドロ君とは随分行動を共にした。親の手伝いの一つで、畑に小川の水を流し込む作業があるが、高地の水はとて冷たい。それを裸足にサンダルの足で流れに入り、石ころの位置を調整する。私にはできなかった。小さなことに思えるかも知れないが、挫折感を味わった。「先進国の日本人」などと偉そうに思っているが、途上国ペルーのさらに最底辺に位置づけられる先住民族の子供の心身は、やわな日本人よりずっと強く尊いと実感した。10か月間ほどの南米滞在中で私の人生に強く影響したのはこの挫折感だったように思う。



灌漑水流の調整をするアレハンドロ

キルワイ村

帰国して、沢山撮影した写真を現像してキルワイ村にも送ったが、返信は来なかった。ペルーの郵便事情の中で紛失したと思っていた。

もう一度ペルーへという思いがあったが手段が見つからず、自立する為に就活をして日本航空の総合職に採用して頂いた。1985年、あの御巢鷹山の事故の直前であった。事

故当時は最初の職場である成田空港旅客サービス部に在籍していた。身近に多くの悲劇を聞きながらも、バブル経済が絶頂へ向かう時期でもあり、飛行機はいつも満席で、複雑な気持ちで忙しく働いていた。入社後数年はいろいろ経験させるという人事の方針で、そのあと、国際線の客室乗務研修、大阪支店の国内線営業、ニューヨーク・ケネディ空港の旅客サービスなどを概ね2年間ずつ経験した。

ニューヨークから帰国後、新聞で国際協力事業団(JICA)の社会人採用の広告を目にした。JALの仕事は楽しかったが中南米とは縁が薄いことも分かったので、「JICAなら中南米の仕事ができる」と惹きつけられた。運試しに受験してみると採用の通知を頂けたが、当時、会社から住宅資金を借りたばかりで、子供は3歳と1歳の娘2人、転職は無謀かとも思われた。しかし住宅融資は銀行が引き受けてくれて、家内も了解してくれたので、転職することができた。

転職したのは1994年、社会人10年目だった。その頃は日本政府が政府開発援助(ODA)を外交の重要なツールとして増加させていた時期であり、JICAは多忙を極めていた。



南米パラグアイで洪水に悩む農業地帯の排水プロジェクトの調査

2年間農業開発の技術協力プロジェクトを担当する部署でJICA事業の基本を習得させてもらったあと、ドミニカ共和国、エルサルバドル、メキシコ、の海外事務所を含む様々な部署を経験してもらい、ホンジュラス事務所長、国内事業部次長、筑波センター所長を経て57歳で管理職定年を迎えた。その後東京センターの所長特別補佐の立場で民間連携事業を担当しながら関東で初の試みとなる分室設置の準備を担当した。

分室の第一号を群馬県に置こう、という方針で交通の要衝でもある高崎を軸に場所を探したところ、高崎市長はじめ市役所の皆さんから大歓迎とのご意向を伺い、高崎市が所有するJETRO群馬に隣接する場所を貸して頂く話が急ピッチでまとまった。JICAは途上国支援を主旨とする組織なので、日本企業を正面から支援するJETROとは異なり、「途上国支援が結果的に地域の発展にもつながる可能性がある」という立場。このため、分室設置も小さなシェアオフィ

スからと想定していたが、高崎市の皆さんの国際化への意識の高さに助けられ、JETROと軒を並べる場所で2021年10月にスタートを切らせて頂いた。JICAの国内の仕事という違和感があるかも知れないが、国際協力も日本の地域に根差していないと意義が薄れるものであり重視されている。

私がJICAに転職した頃はバブル崩壊後とはいえまだ日本経済は強く、一人当たり国民所得もトップクラスで、国際協力額も米国を抜く勢いだった。その後2000年代に日本経済は長い低迷期に入り、国際協力の予算も減っていった。個人的な驚きは日本の一人当たりGDP(ドルベース名目、IMF)が2000年に世界で2位だったものが2021年には28位になったこと。そのような統計的な話を脇に置いても、日本では少子高齢化が進む中で目の前に働き手、若者がいない、という深刻な状況がある。

しかし、そんな今だからこそ、日本人は世界の人たち(8割以上は途上国に住む)と対等な気持ちで仲良くなり、メリットを分かち合うwin winの展開を目指せるように思う。安上がりな労働者としてではなく、貴重な仲間として途上国の若者たちを日本に招けるのではないかと。

日本の技術力は素晴らしいが、一人ひとりの能力や強さがずば抜けている訳ではない。ペルー・アンデスの山奥でアレハンドロ少年の強さに挫折感を味わった日本人として常にそう思ってきた。それだけに、日本の国際協力の議論が、「援助」から「連携」へ、win win関係への橋渡し役へと移行しようとしていることが好ましく思っている。

ところで、ある日フェイスブックのメッセージで「私はMasayuki Takahashiという人をずっと探しているが、あなたではないか?」というメッセージが入り、末尾に下の写真が添付されていた。あのアレハンドロ少年だ。2016年夏、1983年に別れてから33年の時を超えて繋がることのできた。彼はクスコの街へ出てホテル業を営んでいるという。「日本人観光客を見るたびに、あなたを知らないか尋ねていた。あなたを兄弟だと思っている」と。

SNSの凄さ、文明は今も発展していると実感した瞬間だった。



アレハンドロ、ホステイナ兄妹



同窓会維持会費納入、翠巒育英会で寄付のお願い

同封の振込取扱票により、コンビニエンスストア、郵便局にての納入をお願い致します。郵便局振込につきましては、令和4年1月17日より110円振込者負担の値上げもございます。出来るだけコンビニエンスストア振込にてお願い申し上げます。



群馬県立高崎高等学校 同窓会報

【発行人】 坂本正樹(71期)

【編集委員】 田端 穰(54期) 吉永哲郎(54期)
波多野重雄(77期) 新井重雄(78期) 竹内 聡(79期)
花井好機(82期) 木村拓哉(100期) 菊地将史(107期)



同窓の皆様の多大なるご協力をいただき、会報第56号が発刊できました。この場をお借りして厚く御礼申し上げます。御多忙の中、貴重な原稿やお写真をお寄せくださりまして、誠にありがとうございました。(編集委員)

【編集委員からのお願い】

同窓会報1号(1967年)～6号(1972年)をお持ちの方がいらっしゃいましたら、同窓会事務局までご連絡ください。

群馬県立高崎高等学校 同窓会事務局

〒370-0861 群馬県高崎市八千代町2-4-1 TEL&FAX 027-320-6024 Eメール:suiran@email.plala.or.jp